

和紙 だより

■目次

越前和紙への提言 藤井敬子さん	1
取組紹介 京都妙心寺退蔵院方丈襷絵プロジェクト	2
活動紹介 日本折紙協会	3
情報欄 イベント情報お知らせ	4

越前和紙への提言



■藤井 敬子(ふじい けいこ)
1981年、京都市立芸術大学美術学部日本画科卒業後、美術専攻科版画専攻修了。1987年、ルリユールに出会い、銅版画と並行して作品づくりをはじめ。1999年、ルリユールの受注制作と製本指導を行う版画製本工房アトリエ・リーヴス、リヴ・ゴージュを開設。1999年、ルリユール界の情報発信・交流を図る東京製本倶楽部(<http://bookbinding.jp>)を企画設立、運営に携わる。京都精華大学、名古屋芸術大学非常勤講師。美術館、NHKなどで製本やブックアート講座開催。個展多数。

藤井敬子さん(ルリユール作家・銅版画家)
「多様な人口が魅力のルリユール」

●百年保つ西洋の製本技術

ルリユール(Reliure)は、綴じ、装丁等を手仕事で仕上げるヨーロッパ中世から続く「製本工芸」で、主に革で表紙をくるんだ装丁に使われます。印刷術が発明され、革に金箔押し装飾を施した、典型的な西洋の革装丁の本が作られるようになるのは、十五世紀以降のことです。この時期、本が教会や修道院に独占されていた時代から、活版印刷された本を広く普及させたいというルネッサンス期の人文主義的な潮流へと移行したのです。自宅の書架の本を仲間開放したフランスの愛書家ジャン・グロリエは蔵書に深い愛情を注いだ人で、その装丁スタイルは「グロリエ様式」として、格式ある装丁の原型となりました。

本の中身と装丁が余り関係のない時代には、紋章や幾何学模様デザインの主流でしたが、十九世紀に入ると装丁も本の内容とリンクさせるようになり、二十世紀にはマリウス・ミシェル、ポール・ボネという優れた装丁家が現れます。現代の革装本も基本的な構造は十六世紀頃からあまり変わっていませんが、マチエールや技法をめぐる探究がさまざまなスタイルを生み出しています。

日本に西洋の製本技術が入ってきたときには、産業製本として導入されたこともありましたが、仮綴じ本を読者が製本するというルリユールの習慣は定着せず、栃折久美子さんたち先達の紹介によつて知られるようになりました。道具も日本では入手できないものが多く、フランスから輸入したり、かがり台などは木工作家



製本の道具：骨製のヘラは自分で削る。コピト、スプリングコンパス、かかと付き直角定規。(右から)

藤井さん作品

ATELIER LEAVES
<http://www2.ocn.ne.jp/~reliure/index.html>

に作ってもらいます。

●ルリユールのセンスで和紙を楽しむ

本づくりに欠かせない紙に関しては、私たちは今や世界中の製本や修復に携わる人々が使う和紙という素晴らしい素材に恵まれています。日本には和紙という製本の優れた伝統があるので、その良さを取り入れてとても素敵なのを作ることができます。日本語の本づくりにはやはりどこかに和紙を使いたいですね。和紙の良さは軽く、手に馴染むことです。昭和の初期の本には、活版印刷をはじめふつうとした和紙に合う本も多く、その軽さには驚くこともありました。

和紙にインクジェット印刷はなじみがよく、今や版画の手法に取り入れる方もおり、写真や図柄などを印刷した紙を面白い綴じ方や装丁にすると自分だけの本や写真集を作ることができます。和紙の強さを活かして、ミシンで縫ったり、ステッチを施したり、織ったりもできます。私の場合、装丁には紙や布、革、金属、木等何でも使いますが、見返しにはよく和紙を使います。表紙や見返しに使う大人のハイセ

ンスな模様の和紙が少ないですし、本の内容に合わせたので、白い和紙を顔料で染めたり、アクリル絵の具で彩色したり、版画を刷ったり模様紙そのものから作ることもあります。展覧会や個展の案内葉書、年賀状の美しいものは、折本や綴葉装(てつちようそう)等の和綴じで、見やすく小さなアトブックに仕立てるのも洒落ています。材料は実際に見て買うことが多いのですが、ネットショップでは、和紙の単位も匁とグラム数、おおよそでも厚さ何ミリと併記されていると有り難いです。

●東京製本倶楽部

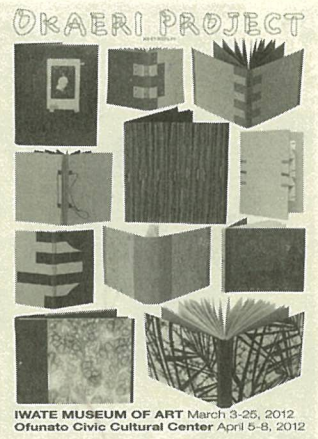
一九九九年、ルリユールを多くの人に知っていただくためと情報交換の場として「東京製本倶楽部」というネットワークを立ち上げました。会員は、国内外の製本家を中心に、愛書家、デザイナーなど、プロ・アマ問わず本づくりに興味を持つ方、現在百二十五名ほど。隔年開催の展覧会、講演・見学会や勉強会を主催し、会報誌も出しています。

クラブで企画展に取り組むこともあります。二〇〇四年には、「手漉き和紙青年の集い東京大会」の有志より提供された手漉き和紙を使った「和紙でルリユール展」を開催、フランスの巡回展でも好評を得ました。二〇一二年には、

8TH EXHIBITION OF TOKYO BOOKBINDING CLUB / LEATHER BINDING TODAY
東京製本倶楽部国際製本展 革装本の現在

2010年5月3日(月) - 9日(日) 11:00 - 18:00
東京製本倶楽部 東京製本センター 展示室
東京都千代田区千代田 1-1-1 千代田ビル 4F
TEL: 03-5561-1111 FAX: 03-5561-1112
http://www.tokyo-bookbinding.com

東京製本倶楽部の企画展「革装本の現在」

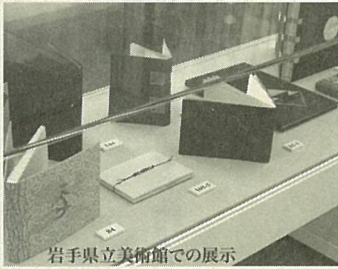


IWATE MUSEUM OF ART March 3-25, 2012
Ofunato Civic Cultural Center April 5-8, 2012

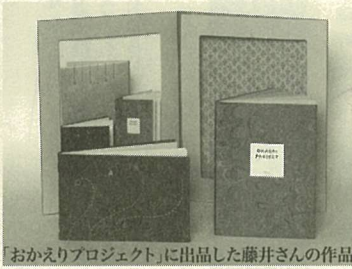
「おかえりプロジェクト」パンフ

会員の仏人製本家の発案で、震災被災地大船渡市の瓦礫の中から発見される写真を納めるためのアルバムを創作して贈る「おかえりプロジェクト」を開催しました。世界十四ヶ国から三百二十五人が参加し、四百八十三冊を大船渡市に寄贈しました。「見たこともないステキなアルバムに感激」「思い出も何もかも流されてしまったけれど、おかえりプロジェクトに出会えてこれからの人生の思い出を増やしていきます」などの感想を頂き、私達としてもやりがいのある取組でした。

本の未来は電子的なものばかりでなく、オーダーメイドで作る本づくりが必要になる場合も生まれ、うまく共存できるとよいと思っています。読んできた本や、読んだ時の印象を製本に閉じ込めて生まれ変わらせるような「ブック・ライフスタイル」の提案もできたらいいですね。



岩手県立美術館での展示



「おかえりプロジェクト」に出品した藤井さんの作品

■文化・伝統技術の継承を図るモデル作り
「京都・妙心寺退蔵院方丈襖絵プロジェクト」

京都市右京区にある臨済宗妙心寺派の大本山、妙心寺は境内に四六の塔頭寺院を抱える日本最大の禅寺である。一般公開されている塔頭の二つ、退蔵院では京都造形芸術大学と連携し、襖絵制作を通して次の時代を担う若手絵師の育成と文化財の保存、伝統技術の継承を目的としたプロジェクトが進行中だ。

●無名の絵師を公募

退蔵院は室町時代、一四〇四年(応永十一年)の開山。国宝の「瓢箪図」をはじめ、狩野元信作庭の枯山水を有する。方丈には、阿須地桃山時代の絵師狩野了慶の筆による襖絵が現存しているが、損傷が激しく普段は取り外して保管している。この様な場合、近年デジタルプリントで複製されたものが展示されるケースも多い。今回のプロジェクトの発案者、副住職の松山大耕氏は「複製や模写では新しい文化もそれを担う人も育たない。過去の文化財の集積に甘んじているのではなく、今ここに生きている私達が四百年先にも受け継いでいける遺産を残す努力をすることが、京都の未来や禅の教えにもつながると考えた」と語る。絵師は才能ある若い人の中から、公募で選考するという大胆な方法を採用した。工程の全体的取り仕切りを椿昇氏(京都造形芸術大学



絵師に選ばれた
村林由貴さん



プロジェクト発案者の
退蔵院、松山大耕副住職

美術工芸学科教授)、技法材料指導に青木善昭氏(同大学日本画コース教授)が受け持ち、制作を支えている。三十人の応募があり、二〇二二年三月、京都造形芸術大学情報デザイン学科大学院卒の村林由貴さん(二六才)が選ばれた。選考理由は、百面もの襖を描ききつてやるという彼女の迫力と描く際の勢いやスピード感だったという。寺に縁もゆかりもなかった村林さんは、アトリエにしている同寺壽聖院に住み込み、修行を重ねながら、二〇二四年秋の完成を目指して日々絵と格闘している。

●職人技の伝承・墨・表具・和紙



連続シンポでは職人も伝統技術を紹介

本プロジェクトは、日本に根付く素晴らしい伝統技術を次世代に伝えていく仕組みにもなる。四百年残る襖を作るために、素材や職人は最高級の体制を採った。墨は奈良・墨雲堂。墨の美しさを表現するために手間暇かけて造り上げたという高級品「百選墨」の中から、絵師は好きなものを使うことができる。墨には同じ黒でも青系、赤系、茶系などの微妙なニュアンスがある。村林さんは硯との相性も試しながら試墨を繰り返し、柔らかな線や勢いのある線など、自分の表現にあつた古い年代の油煙墨を二種類、松煙墨の二種類を選んだ。襖制作は二条城の襖修復などを手掛けた京都・物部画仙堂。社長の物部さんは、襖の歴史・文

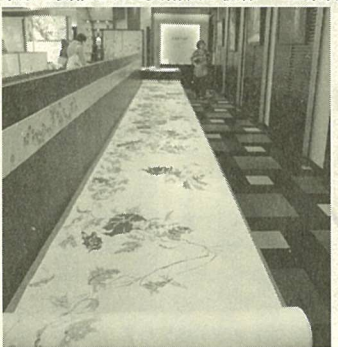
化から話を始め、予め修復されることを前提とした優に百年は保つ構造や工程を説明したという。後継者育成のため同社では二三才の職人さんに今回の襖を担当させているというから、その意気込みが伺える。襖に張られる和紙には越前和紙が選定され、五十嵐製紙所が受け持った。襖紙は、当初わずかな凹凸を拾う金箔が張られる場合も想定し、なめらかな鳥の子紙と決定した。村林さんの早い筆さばきや墨の吸い込みとの兼ね合いを考え、ドーサ引きなしの細く短い繊維で、目の詰まった茨城産三極百分の手漉き鳥の子紙を昔ながらのイチョウの板干しで制作。紙は一年ほど「枯らして」置いて使われる。紙に限らず、糊や墨も時間を経ると質が安定して良い味わいになるというから、伝統技術には「時間」が大切な要素だ。また水墨画では墨と硯と和紙の相性の他に、水が大変影響するというのも興味深い。

●制作過程と現場を紹介するイベント、東京で開催

文化財ができてからただ展示するのではなく、文化財が作られる過程や現場を見て欲しいというのも副住職の思いだ。二月四日〜十七日、このプロジェクトに賛同し、社会貢献の一環として会場を提供した東海東京証券ギャラリー



▲素材や道具も展示



東京で開催された美術展の様相

(東京日本橋)では、これまでに描かれた習作や使われる素材や道具を紹介するプレミア美術展「京都・妙心寺退蔵院、村林由貴襖絵展」美の創造とそれを支える職人たちが行われた他、プロジェクトの全容を発信しようと四日間の講演・パネルディスカッションが開催された。

講演では、禅も寺も水墨画も全く知らなかった村林さんが寺に飛び込み経験した出会いや心の変遷、描いた絵の意図などがスライドを交えて紹介された。また、パネル討論では、発案者の松山、椿、青木、吉田亮人(写真家)、近藤雄生(ライター)の各氏が登場し、本プロジェクトの意義を探ると共に、職人自らが自分達の技や歴史を解説した。会期中には、シンポジウム参加者六百人、美術展来場者数四千人余りの人が訪れ、本件への関心の高さを伺うことができた。

退蔵院では、襖絵制作の現場を是非現地京都で見て欲しいとの願いから、月一回の見学会もを行っている。二月十六日の見学会には全国から約三十人が集まり、退蔵院襖絵の前段階として描かれた壽聖院襖の生命感ほとばしる野菜、虫、植物、木、鳥、動物に見入っていた。



現地見学会の様

活動紹介

■日本折紙協会 「折り紙」から「ORIGAMI」へ

東京墨田区本所、スカイツリーを仰ぐ下町に「東京おりがみミュージアム」併設の「日本折紙協会」事務局を訪ねる。一九七三年十月、日本の伝統的な造形文化であり、趣味・教育・リハビリテーション効果など、優れた教育素材である「折り紙」の普及活動を目的に設立された。

会員数は全国に約一万人(平均六十才代、女性が八割)、支部数(国内五七、海外二)、折り紙団体としては国内最大手。会報でもある「月刊おりがみ」編集長の青木伸雄さんにお話を伺った。

編集長 青木伸雄さん
編集部 青木伸雄さん



会報「月刊おりがみ」

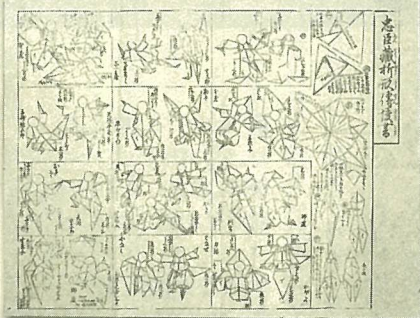
●日本の折り紙文化

折り紙の起源は定かでない。中国から渡来した紙は、日本独自の製紙技術により、ものを折り、包むのに適した柔らかく強靱な和紙を生み、それが折り紙を育んだとされる。日本の折り紙は、神事や祭事に源を発する熨斗や折形札法などのいわゆる「儀礼折り紙」から、鶴などを折る今「遊戯折り紙」へと発展する。

遊戯折り紙が書物に登場するのは、江戸時代、井原西鶴の「好色一代男」(二六八二年)の一節に「或時はおり居をあそばし、比翼の鳥のかたちは是ぞと、給はりける。」と出てくる。この「おり居」(おりすゑ)が今の折り紙のことで、香道

で使われる畳(たとう)紙を「折居」と呼ぶのは、和紙を折って包む文化から派生したらしい。浮世絵にも折り紙に興じている様が描かれ、着物の柄にも鶴をはじめとする折り紙模様が見えることから、江戸時代、折り紙が庶民の遊びとして定着している様子がうかがえる。

伝承作品蟹
は、江戸時代後期、足立三之なる人物が様々なことを十年間書き留めた備忘録で、折り紙に関するものが六二頁あり、蟹やクモなどの折り方が図解されている。桑名出身の魯縞庵義道による「秘傳千羽鶴



江戸時代の人物折り紙
新撰人物折形手本忠臣蔵
(吉徳これくしょん所蔵)

助折形工夫の伝(二八〇六年)や芝居の登場人物を折った「折形手本忠臣蔵」(二八〇〇年頃)などがあり、興味は尽きない。

●現代の折紙事情

現在の折り紙は、戦後小学校の図工の時間に折り紙が取り入れられたことから、急速に広まった。

鶴、あやめ、魚などの基本形の折り方を応用すれば、創作折紙に展開させることができる。また、いくつかの部分に分けて作品を作る複合折り紙、何枚もの紙を同じ形に折って合体させるユニット折り紙、先の「連鶴」のような切り込み折り紙、動く仕掛けのある仕掛け折り紙等があり、「月刊おりがみ」には月平均七十の投稿作品が送られてくるという。

当会創設者の一人で、初代理事長の故佐野康博氏は「一枚の正方形を切らずに一つの作品を折ることに限定した「不切正方形一枚折り」の提唱者で、少ない折り数でユニークな形を追求するシンプルな作品を好んだ。表が色紙、裏が白の大量生産の正方形の洋紙は、安価で折り目がくっきりとし、工程が分かりやすかったことで、和紙に取って代わったが、明治時代に人氣のあった「ナマズ」や前出した連鶴なども、和紙でなくては折ることの出来ないもので、近年また見直されてきているという。

●協会の事業

当会の運営は会費と事業収入によって支えられ、資格認定制度を設け、折紙指導者を育成している。会員は、会報誌「月刊おりがみ」の購読会員(年間八七〇〇円)、協会の活動目的に賛同する正会員(年間二七〇〇円)、「おりがみ四カ国語テキスト」掲載の約六十作品をマスターし、折紙教室を開くことのできる「折紙講師」、更に折紙シンポジウムや講師勉強会、講師講習会などで専門知識を修得した「折紙師範」「上級折紙師範」などで構成される。二泊三日で開催される「折紙シンポジウム」は、創作・折り図、歴史研究、高齢者・障害者教育、児童教育、国際交流などの「分科会」の他、相互に作品を教え合い、技量向上を目指す「教室広

折紙シボジウム
「教室広場」会場風景
(二〇一三年七月 京都)



場」、懇親会が設定され、小旅行も兼ねた折り紙交流と研鑽の場として、毎年三百名ほどの参加がある。「講師講習会」「講師勉強会」も東京と大阪を会場に年二回実施され、指導の心得や、正しい折り方を学習することができる。「世界

のおりがみ展」は、協会支部による共同・個人制作作品展示を中心に、折り紙教室の開催、折紙関連商品の販売が行われる。展示内容がパック化されており、費用も明示してあるので、イベント企画者には有り難い。これまで海外展示の実績も含め、二五〇ヶ所で開催された。以前は百貨店の文化催事などに全セットを展示することが多かったが、最近では子供、高齢者イベントなど、テーマを絞った展示が人気だという。協会では十一月十一日を「おりがみの日」と定め、「おりがみカーニバル」などの記念行事も行っている。

人工衛星のパネルや地図に応用されている「ミウラ折り」も、「コンパクトに折りたたむ」日本の折り紙文化なくしては考案されなかったかもしれない。青木さんは、「折り紙には、芸術、教育、科学などいろんな切り口があり、確かな手触りという魅力があるので、今こそこの面白さを伝えていきたいですね」と語った。

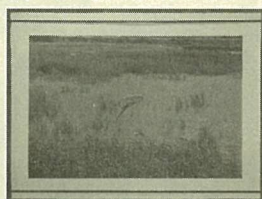
和紙ニココーナー

■国際写真フェスティバル「京都グラフィック」
で和紙写真展示

京都市内の寺や町家、文化施設など二ヶ所で二四ヶ国二十八人の国内外の写真家による国際写真展が、四月十三日〜五月六日の二十四日間に渡って開催される。

この展覧会は、照明アーティスト・仲西祐介さんと私人写真家・ルシル・レイボーズさんが企画したもの。日本の写真展は余り一般化していないが、歴史や時間を感じさせる京都という場で作品展示を工夫することで、写真芸術に親しむきっかけを作ることができるのではと考えた。会期中、トーク、ワークショップやツアー等も行われる。

今回二人の作品が和紙に印刷されている。スイス人の旅行家、作家、詩人、写真家であり、日本をこよなく愛した故ニコラ・ブーヴィエ氏の作品(弘道館で展示)はインクジェット用の特殊コーティングを施した耳付き越前鳥の子局紙に印刷された。舞踏家・土方巽などの写真で知られる細江英公氏(高台寺円徳院で展示)はモノクロ写真を阿波和紙の楮二層紙などでモダンな



情感あふれるブーヴィエ作品

「写真絵巻」に仕立てた。細江氏は「印刷紙への印刷が劇的に減っている今日、和紙への印刷はインクと紙との関係を研究すれば、表現の幅が一段と広がる可能性がある。」と語った。



細江英公氏の「写真絵巻」

情報欄

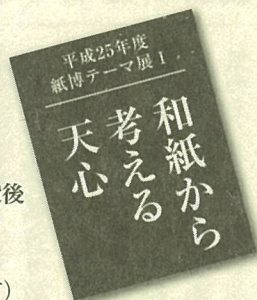
●イベント情報

■紙祖神 岡太神社・大瀧神社春季祭礼
時:5月3日(金・祝)~5日(日・祝)
場所:岡太神社・大瀧神社(越前市大滝町)

■神と紙のまつり・大掘り出し市
時:5月3日(金・祝)~5日(日・祝)
場所:和紙の里通り(越前市新在家町)、パピルス館特設テント
和紙の大掘り出し市、クラフト教室、特産品フェア
※今年は、県内高校(武生東高校、武生商業高校、鯖江高校、敦賀高校)4校書道部による「書道パフォーマンス」が4日に開催されます。

■第33回 越前陶芸まつり
時:2013年5月25日(土)~27日(月)
場所:越前陶芸村(越前町小曾原)
和紙販売あり

■「和紙から考える天心」生誕150年、没後100年を記念
時:4月3日(水)~6月2日(日)
場所:紙の文化博物館(越前市新在家町)
福井県に縁のある岡倉天心と越前和紙、日本画家達の重要性を紐解く。



■「X(かける)和紙」展
時:5月3日(金・祝)~6月2日(日)
場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)
福井県和紙工業協同組合青年部会によるアート展。

■「うつす和紙」展
時:6月10日(月)~6月16日(日)
場所:ふくい南青山291(東京・港区南青山)
越前和紙の里で開催した展覧会を東京で展示。



●組合、IT経営力大賞2013奨励賞受賞
福井県和紙工業協同組合が、経済産業省の中小企業のIT経営の参考となる事例「中小企業IT経営力大賞2013」(応募総数203件)の審査委員会奨励賞を受賞。平成23年に導入したPOSレジでの売れ筋商品の情報分析、組合員への情報提供、組合員との新商品開発支援、組合員のHPとの連携による通販コストの削減などの取り組みが評価されました。

編集後記
春うらの京都。JR東海が1993年から展開している「そうだ京都、行こう」京都観光キャンペーンの今年のポスターに使われているのが、本誌でご紹介した妙心寺退蔵院の紅しだれ桜です。副住職のお祖父様が「将来、花咲かじいさんと言われるぞー」と言って50年前に植えたものだそう。松山さんは「目の黒いうちには認められなくても、この桜のように未来に襖絵が残れば」とおっしゃっていました。(よ)